

初等音楽科におけるアクティブ・ラーニングの研究 I — 「冬げしき」(第5学年) の授業を通して —

河北 邦子

Research of Active learning at music study at elementary school (I) — Teaching of “Fuyu geshiki” (Fifth grade) —

Kuniko KAWAKITA

はじめに

初等音楽科の指導法を担当する筆者は、かねてより小学校現場の T 教師の授業を研究対象としてきた。その授業では、常に児童が授業を推進しているような印象を得ている。

児童はよく挙手し、発言する。グループ活動中、音楽や言葉について活発に話し合い、話し合いに基づいた音楽表現場面においても互いにしっかり見聞きし、「良かったところ」「もっとこうすれば良いと思ったところ」などについて意見交流している。

T 教師は、授業の展開時はもとより、開始直後のねらいを確認する時、まとめの時も必要な言葉を児童から引き出している。以前はクラス担当教師であったが、現在は音楽専科を担い、3～6年生の各学年複数クラスを担当している。複数のクラスの児童名をよく覚えており、概して授業中に指示語を多く用いない。

アクティブ・ラーニングという言葉を目にした時、この T 教師の授業の様子が頭に浮かんだ。筆者の印象通り、その授業は果たしてアクティブ・ラーニングという学びの在り方なのか。アクティブ・ラーニングであるならば、児童たちはそこで、どのように何を学び、何ができるようになり、その後の生き方にどのような影響を与えていくのか等、興味をもち、教育現場に学びたいと考えた。

1. 目的

平成 29 年度の学習指導要領の改訂に伴い、文部科学省より「どのように学ぶか」の象徴的方法としてアクティブ・ラーニング（以後 AL と略記）という教育方法が示された。

AL とは何なのか、AL が打ち出された目的とその内容、そして AL の基本的な指導方法の概要を知る。また、各教科にはそれぞれ異なる「見方・考え方」があり、AL がすべての教科で実践され、統合されることが求められていることから、音楽科の AL による学びの特性について考える。

前述の T 教師による授業から、AL のあり方を学ぶ。教師と児童、児童間の交流がどのように関連をもっているのかをみていく。そこで児童はどのように、何を学んでいるか、何ができるようになるのかを探る。併せて、AL による授業が豊かに展開していくために、教師はどのような人的環境として存在し、どのような指導の工夫をしているのか探る。加えて、音楽科の教科の

特性、「見方・考え方」について分析・考察する。

2. 方法

A Lの意味、及びA Lという授業方法のねらいについて、中央教育審議会の議事録等を参考に文部科学省の意図を探る。そして、小学校現場での授業記録と、児童が授業終了時に記録した学習カードを通して、児童個々とクラス全体の関係性をみていく。そこで児童が何を学び、何ができるようになるか、またA Lを展開するための指導法、及び音楽科におけるA Lの特性について、プロトコルと学習カードを分析・考察する。

3. 学習指導要領の概要

1) 平成 20 年度版学習指導要領

平成 20 年に行われた教育基本法の改正、学校教育法の改正を踏まえ、学習指導要領¹⁾が改訂された。平成 10 年に示された教育理念「生きる力」は踏襲され、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の三つの柱をバランスよく育むことが求められた。そして、三つの柱の一つである「確かな学力」の要素として「① 基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」、及び「③ 学習意欲」の3点が重視され、学校教育において調和的に育成するよう規定された。

2) 平成 29 年度版学習指導要領

平成 29 年 3 月 31 日、新小学校学習指導要領が告示、平成 32 年度より施行となった。学習指導要領改訂の方向性である、新しい時代に必要となる資質・能力として「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」の三つの柱が示された。そして「何ができるようになるか」、そのための学習内容「何を学ぶか」、学習過程の改善「どのように学ぶか」が示された。

「何ができるようになるか」では、大きな理念「生きる力」の育成は継続しつつ、前学習指導要領（2008）で示された「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視…」²⁾の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成し、広く社会と共有・連携していくことを求めている。「どのように学ぶか」では、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理³⁾し、主体的・対話的で深い学びによって目指すことが示された。

この学習過程について「アクティブ・ラーニング」、つまり「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」という3つの質的改善が示された。

第2章第6節に示された音楽科の目標には「…音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を…育成することを目指す。」と加筆された。これは音楽科の見方・考え方によって育まれる資質・能力があり、音楽科の本質的な意義があることを示している。そして、音楽科が目指し、育成すべき資質・能力として以下の3つの項目が示され、

これまで目標としてきた文言は3番目に示されている。

- (1) 曲想と音楽の構造などのかかわりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技術を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

4. 音楽科の特性

西園 (2008)⁴⁾ は、音楽科の基礎的能力は音・音楽の「知覚・感受」能力を育成することであり、この基礎的能力を活用することによって思考力・判断力・表現力、及び学ぶ意欲を育成するという。つまり音楽科では音や音楽を質として認識し、共有できるようになることが「生きる力」を育むことにつながるという。質とは、高揚と低下などの「特質」、楽しさや悲しさなどの「感情」、軽やかさや重厚さなどの「雰囲気」である。その「特質」や「感情」、「雰囲気」は、共通事項であるリズムや音色などの音楽の要素、そして反復や変化等の組織化によって織り成され、創られる。その音楽を知覚し、感受していくことが音楽科の特性という。

西園の記述は中等教育について述べたものであるが、その本質は初等教育においても同様と考える。初等教育段階では音色やリズムなどの音楽の要素を知覚する力はあるものの、要素間の関連を識別する能力は未熟であろう。しかし、初等教育において音楽の要素を知覚することに価値観をもち、そこで生み出される質について興味・関心を寄せる経験を重ねることは、中等教育でのより高い知覚力と識別能力の育成につながることを期待できよう。

感受も同様である。音楽の要素や、要素間の関連から「特質」や「感情」、「雰囲気」を感受し他者との意見交流の場が設けられることによって、音楽の捉え方や感じ方、その多様性に気付くことができる。また感受の価値づけがなされることによって、この年齢なりの感受性の大きな育ちが期待できよう。音・音楽という媒体により、質を感じ取り、共有し合うなどの音楽科特有の学びは、生涯の豊かな生活につながると考える。

5. アクティブ・ラーニングとは

平成28年6月の教育課程部会の総則・評価特別部会において、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学びのあり方を「アクティブ・ラーニング」とし、その視点から学習過程の改善を求めている。つまり「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」によって、「生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成」し、「知識の量を削減せず、質の高い理解を計るための学習過程の質的改善」を行おうというのである。そして、その学びは完結するものではなく、また確実な正解というものが在るわけでもなく、継続的に問い直されるものであるという。

「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」という言葉のもつ内容について、平成27年8月の「教育課程企画特別部会 論点整理」⁵⁾を参考にしながら、それぞれの要件について考える。

1) 「深い学び」について

授業改善のために「習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか。」と記されている。

学習過程において新たな知識・技術を身につけ、既知となったそれらを用いて思考や判断、表現する。その過程で資質や能力が伸び、見方や考え方に変化がおこる。更に新たな知識や技術を得て、より深い思考や判断がなされ、一層資質や能力も膨らみ、見方や考え方は、より広がりを持ち、深まる。この繰り返しの作用は、求め続ける限り終点はないであろう。

同年齢の児童が「深い学び」を展開するには、教師には指導の工夫など大きな役割が求められるのではないかと考える。つまり、児童個々のもつ知識や技術を言葉など、何らかの表現で引き出していくことが必要である。その大前提として、児童の教師に対する信頼関係や、児童間の互いに認め合い、高め合おうとする人間関係がなくてはならない。また、児童間での、言語をはじめとしたさまざまな表現を調整することで、より深い学びへと展開していくよう、指導言語や場作りなどの環境を適宜再構成していくことが教師の重要な指導ポイントとなる。

2) 「対話的な学び」について

「対話的な学び」について「他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。」と記されている。

児童と教師、児童と児童の人的環境、また身の回りの物的環境と関わる場面が必要である。その場面で、言葉などの表現の交流を通して、自身の知覚・感受のあり方、考え方や判断基準を意識化したり、新たな知識や技能を習得したり、新たな価値を得るなど、相互に作用しあうことが必要なのである。教師から新たな知識・技術を得ることは従前から行われており、今後も学習の大半を占めていく。しかし児童は、友だちの発言から新たな知識を得たり、友だちの予想外の表現を目の当たりにするのは、教師から新たな知識を教わり、完成された表現を見聞きすることとは異なった刺激を得るであろう。

同年齢の児童同士は、知識・技術の質や量、及び関心ごとや感受能力のレベルは似ている。この、持てる力が近い集団での学習過程において、一児童の知識・技術の有り様を発言や表現で見聞きすることは、他児にとって影響力のある刺激となる。活動を通して得た知識や技術を共感し共有しながら確認すると共に、自らを振り返り自覚することにより、新たな目標を設定できるなど、主体的な学びを生み出すことにつながると考える。

3) 「主体的な学び」について

主体的な学びについて「子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。」と記されている。

一人ひとりの児童が、それぞれ興味・関心をもって積極的に取り組む場面があることが求められる。そして、学習活動を通して取り組みを振り返り、獲得できた知識・技術、育かれた資質や能力を自覚すると共に、次への課題を意識する時間と場面が必要である。振り返りや自覚、次への課題は、場を共有した他児や教師と共有することによって確実なものとなり、共に取り組も

うとする意欲が生まれる。この過程によって、主体的な学びを成立させることができると考える。

教師は、児童に興味・関心をもたせるためには、児童の既知の知識・技術と現在の状況を把握し、その狭間にあることがらに対して意識を促し、着目させ、課題解決に向かう意欲を育まなくてはならない。それは、同年齢とはいえ、知識や技術の保有状況や育ちの有り様に個性のある児童個々、また児童間の関係性について熟知する教師においてのみ可能であろう。

6. 初等音楽科授業の結果と分析

現職教師の指導による初等音楽科授業のプロトコルから、児童が何を知覚・感受し、思考、判断、そして言語や歌唱表現をおこなっているかをみていく。次いで、教師の指導のあり方、また音楽科の学びの特性を考察する。

授業分析の観点は、一つに「主体的・対話的で深い学び」が成立しているか、つまり子どもたちが「思考」「判断」「表現」を重ね協働することで、新たな知識を獲得したり、見方や考え方に気づいたり、新たな発想やアイデアを得ているかである。次いで、教師は、児童が「主体的・対話的で深い学び」を達成できるようALをどのように支えているか、つまり指導言語や板書、範唱や伴奏などの音楽表現、児童の意見交流の場づくり、深い学びに向かわせるための助言などの環境づくりをしているかである。三つ目は音楽科の見方や考え方を働かせた学びを通して、どのような資質・能力を育成していくことができるかである。

具体的な方法は、小学校での現職教師の指導による音楽科の授業をビデオ記録し、プロトコルを作成・分析することにより、アクティブ・ラーニングについて考察した。研究対象の、授業の概要は以下の通りである。

日 時： 2013年12月13日（金）5時限目 14：00～14：45

対 象： 山口市 O 小学校 5年生

授業担当者：山口市内O小学校のT教師（3～6年の音楽専科、以前はクラス担任）

教 材： 「冬景色」文部省唱歌 / 石桁冬樹 編曲 3節の有節形式 3拍子

ねらい：グループごとに、担当部分の歌詞を感じ取り解釈しながら表現の在り方に結びつけ、表現する。また、そこで得た解釈のもと、全員が全体唱する。（第2次、第3時）

授業の流れの概要は、以下の5つの過程である。

- ① 前日の学びと関連付けながら、本時の活動に向かう姿勢を確認する。（約6分）
- ② クラス全体でねらいを確認：1～3番全体を全員で歌唱し、前時の活動内容を復習しながら、本時の目的を確認する。（約8分間）
- ③ グループ活動：3つのグループがそれぞれ1～3番を担当し、歌唱表現の在り方についてコミュニケーションする。教師より、歌唱活動と話し合いを交互に行い、5回は歌唱するよう指示がある。（約10分間）
- ④ グループ発表：3つのグループは、それぞれ担当部分について検討したことをふまえて表現し、他グループからの評価を得る。（約9分間）
- ⑤ クラス全員で斉唱：グループ活動で得た1番から3番までの歌詞の解釈を思い出しながら確認し、全員で1～3番を歌唱する。そして教師より新たな課題を探るよう提案がある。（約

8分間)

1) 結果と分析

対象の授業は5年生の共通教材である「冬景色」である。歌詞は文語体であり、また5年生の児童にとって身近とは言えない言葉があり、実感しやすい内容とはいえない。前時に1～3番の言葉や場面の状況を学び、音楽にのせて歌唱活動をしている。対象の授業時は、歌詞に示された様子や気持ちをイメージし、歌唱表現することをねらいとしている。3つのグループに分かれ、それぞれが1～3番を担当し、歌詞に向き合い歌唱表現する。

(1) プロトコルの分析

授業の流れに沿って、5つの場面のプロトコルの一部について〈主体的・対話的で深い学び〉〈教師の環境づくり〉〈音楽科の特性〉の視点で分析する。

表の左列は授業開始からのプロトコルの順であり、中央は発話者(c:一人の児童の活動、cn:不特定多数の児童の活動、ca:学級の全児童による活動、cm:全児童またはグループの児童による歌唱活動、t:授業者の活動)、右列は発話内容等である。

児童及び児童集団の発話等はゴシック体、教師の発話等は明朝体で示す。

① 本時のねらいを確認する場面

授業開始時の、前時と関連づけながら、本時の活動のねらいや活動を確認する場面である。グループ活動前に、1～3番の歌詞に表されている時間や情景を確認しながら、言葉の捉え方や雰囲気感受のありかた等に注目し、グループ活動の方向性を導いている場面である。1番「早朝の入り江」、2番「のどかな昼間の田園」、3番「夜」についてみていく。

表1. 本時のねらいを確認する場面

NO	話者	発話者の内容
21	t	はい、歌詞をよく覚えた人。
22	ca	(手を挙げる。)
23	t	すごいね。はい、座ってください。すごい、すごい、すごい、上手いよ。では、昨日の学習カードに書いてくれた、みんなすごくよくね正直にね、しかも気持ちを込めてよく書いてくれました
24	t	で、そこでえっとNくんが昨日ね、Nくんがなんて書いてくれたかという「強弱が自然にできるようになりました。歌ってる時に。」ね、すごいと思わない。
25	ca	(拍手をする。)
26	t	ここを、ここを強くしよう、ここ大きくなってから強くしようじゃなくて。今も、例えば(メロディーの一部を「ラ」で歌う。)って自然に歌ってるよね。それがね、できるようになりましたって気がついてくれて、すごく嬉しい感想でした。

〈主体的・対話的で深い学び〉

・学習カードに対する教師の評価より、児童は歌いながら強弱を自然につけること(24)、気持ちをこめて歌うことができること(27)に価値があることを知る。
・児童は様子や気持ちを何をもとに判断できるかを考え、歌詞によって知り得る(34)と気づく。

〈教師の環境づくり〉

・教師は「歌詞を覚える」という前時の宿題、及び学習カードの記述について、児童の対応(23)を評価する。

27	t	そしてね、Hさんね、Hさんが目標はね「気持ちを込めて歌うこと」なんですから。で、その気持ちを込めて昨日も歌えるようになって、「もっと気持ちを込めて歌いたい」という考えをもって(聞き取れず)Hさんね。それで、今日はちょっとこっち見てください。
28	ca	(黒板の方を向く。)
29	t	歌詞の内容とか、いろんなこう場所のこととか、いろいろ考えて、昨日と前の時間勉強しました。で、様子や気持ちね、だからこれをもっと表われるようになったら、Hさんのように気持ちを込めて歌いたいという願いが伝わるんじゃないかと。様子や気持ちって、何から、何が手掛かりになる？
30	c	表情。
31	t	あの、何から見たら？何を見たら様子や気持ちがこう読み取れる？
32	cn	様子、表情。
33	t	いやいや、歌の。
34	c	歌詞。
35	t	歌詞よね。歌詞よね。歌詞から様子や気持ちをね、様子や気持ちが表れるように工夫していきたいと思えます。工夫をして歌いましょう。読んでみて。さんはい。
36	ca	様子や気持ちが表れるよう工夫して歌おう。 板書を読む。
37	t	はい。では、その手掛かり。歌詞。はい、全員起立。
38	ca	(椅子から立つ。)
39	t	もう、みんな覚えてるよね。ちょっと読んでみましょう。さんはい。
40	ca	「冬げしき」の1番から3番の歌詞を音読する。

・児童の学習カードに対する教師の評価(23, 24, 26)を通して、授業のねらいを焦点化させる。

・前時の学習カード記述内容を紹介(23~27)し、児童の言葉を用いながら、本時の目的と活動、学習に向かう意欲を育てる。

・本時のねらい「歌詞を解釈し、気持ちを込めて歌う」を達成するために、何に注目すべきか児童に考えさせ、発言させる(29~34)。

・歌詞の音読(40)により、思考の対象となる歌詞に児童の意識を焦点化させる。

<音楽科の特性>

・自分の思いを、自然に歌唱表現できることが素晴らしいことであることを知る(24~26)。

・「気持ちを込めて歌う」ことの重要性和、具体的な方法を知る(27)。

・歌詞を感じ取り、解釈して歌唱表現することが重要であることに気づく(29~35)。

② クラス全体で1~3番までの詩を解釈する場面

<1番「早朝の入り江」>

1番の歌詞 「さざり消ゆる港江の 船に白し朝のしも ただ水鳥の声はして いまだ覚めず岸の家」

表2. 1番「早朝の入り江」を解釈する場面

48	cn	朝。早朝。
49	t	早朝だよ。じゃ、早朝の空気。5時とか、起きたばかりの空気、どんな感じ？
50	cn	ひんやりしてる。
51	t	ひんやりしてる。それから？
52	c	静か。
53	t	静かで。
54	c	おだやか。
55	t	おだやかで。
56	c	落ち着く。空気。
57	t	落ち着く。そして、空気。
58	c	怖い。
59	t	怖い。んー。

<主体的・対話的で深い学び>

・1番の情景について、一人の児童が「早朝」と答えたのに対し、他児は早朝の空気をイメージし、「ひんやり」(50)、「静か」(52)と五感で捉える言葉や、「穏やか」(54)、「落ち着く」(56)、「怖い」(58)、「すっきり」(60)、「きれい」(62)と雰囲気や感情の言葉で連鎖的に答える。

<教師の環境づくり>

・教師は「早朝…5時…起きたばかりの空気」(49)では、「誰も動いていない空気」(61)と歌詞にはない言葉を加え、児童に五感でイメージできるよう工夫している。狭霧がかかった港江の、船や家々の場面をイメージすることは体験上難しいであろうが、早朝の空気を感じることはできると

60	c	すっきり。	判断したことによるものと思われる。
61	t	すっきり。んー、じゃあ、すっきりした感じの静かでおだやかで。まだ誰もね、動いてないから空気の状態はどんな感じ？	・教師は「すっきり」という児童の言葉を捉え、「誰も動いていない空気の状態」(61)と言葉を添え、さらにイメージを深めることを促し、児童間の意見交流を促す。 ・児童の言葉を revoice することで、児童の発言を受け止め認めると共に、他児に伝えている。
62	c	きれい。	
63	t	きれいだよね。空気が澄みきっててきれいなんよね。まだ汚れてない、まだ誰も二酸化炭素吐いてない感じ。ね、汚れてないきれいな空気なんよね。澄んでる。澄んできれい。これを1班の人にこんな感じで歌ってほしいんです。お願いしますね。はい。では、2番の時は？	・児童の意見をまとめ(63)、次のグループ活動で音楽表現に結びつけることへの期待を示す。 <音楽科の特性> ・言葉、詩から場面をイメージすると共に、感受した内容を、雰囲気や感情を表す言葉で意見交流を重ねながら、クラス全体で解釈を共有する。 ・色々な感じ方、捉え方があることを知る。

< 2番「のどかな昼間の田園」 >

2番の歌詞 「からす鳴きて木に高く 人は畑に麦をふむ げに小春日ののどけしや 返りざきの花も見ゆ」

表3. 2番「のどかな昼間の田園」を解釈する場面

64	cn	昼。	<主体的・対話的で深い学び>
65	t	昼よね。昼は、これは、まず春のようにあたたかい。ね、そして、畑仕事してる人ね。そして、ふっと見たら季節外れの。	・児童は昼の場面をイメージし、「明るい」(68)と五感で捉えた言葉で答える。他児がその言葉に「強い」(70)と程度を示す言葉を加える。その児童の言葉に、教師が「どんな…」と質問すると、「ぼかぼか」(72)という雰囲気を表す発言がある。さらにその言葉から他児は「…色で表すとオレンジ」(76)と、新たな着想で発言する。一人の児童の発言は、他児に共感(68)や新たな着想(78, 80)を生み、多様に関連しながら続く。
66	cn	花。	
67	t	花が咲いてるわけよね。じゃ、まず明るさはどんな感じ？昼間。	・児童は「返り咲きの花」の場面での気持ちを「ほっこり」(86)という言葉で表現している。この言葉は、朝の場面では他児が発言した言葉である。教師がその言葉のもつニュアンスを他児に問いかけると、「丸い」(90)、「暖かい」(94)という言葉で表す。一人の児童が発した言葉を、クラス全体で分析し、共有している。
68	cn	明るい。	<教師の環境づくり>
69	t	明るい。	・教師は「昼…あたたかい…季節外れの…」(65)と発問で始め、歌詞には無い「明るさ」(67)という言葉を用いて「どんな感じ」と質問する。
70	c	強い。	・人の存在を示す「麦踏み」人に焦点を当て、「その時の気持ちは」(83)と質問する。
71	t	あ、力強い感じ？少し。この明るさもどんな明るさ？	・教師は児童の発言を revoice(69, 71, 75, 77…)し、ク
72	c	ぼかぼか。	
73	t	ん？何？何？	
74	ca	ぼかぼか。	
75	t	ぼかぼか。ぼかぼか光。ぼかぼかで。	
76	c	色で表すとオレンジ？	
77	t	あ、色で表すとオレンジ。なるほど。オレンジね。	
78	cn	白。	
79	t	じゃあさ、早朝は何色？	
80	cn	水色。	
81	t	水色。なるほど。	
82	cn	白。	

83	t	白。そんな感じやね。透き通った感じね。うん。では、この季節外れのこう畑仕事、麦踏みをしているわけよね。麦踏をして働いてたら、そこに花を見つけて。その時の気持ちを。じゃあ。Oさん。
84	c	なんか。
85	t	ちょっと言ってくれるかな？
86	c	えっと、季節外れの花があったら、最初はびっくりするけど、後でえっと、ああ、こんな花が咲いているんだなって思って、ほっこりした気持ちになります。
87	t	ほっこりした気持ち。ほっこりを普通の言葉で言ったら？
88	cn	ほっこりした感じ。
89	t	普通の言葉で言ったら？ほっこりした時ってどんな時？
90	c	丸い感じ。
91	t	丸い感じ。
92	c	ほっこの意味って。
93	t	気持ちいい？
94	c	暖かい。
95	t	暖かい感じ。じゃあ、暖かい感じね。はい、では2番を担当する人、手を挙げてください。

ラス全体に、児童個々の発言を届けながら、他児の発言を促す。

・一児童の「ぼかぼか」(72) という感覚的な発言を、他児が「色で表すとオレンジ」(76) と応える。教師は、この児童の新たな視点による雰囲気の表わし方を受け止めた後、1番の朝についても色でイメージするよう促し、違いを鮮明にするよう促す。

・「人は畑に麦を踏む」という文語体の歌詞を、「麦踏をしている人」と言い換え、児童が実感しやすくしている。そしてその唯一登場している人が、時ならぬ花を見つけたことに注目させ、その人の気持ちについて思いを馳せるよう促す。

<音楽科の特性>

・文語体の歌詞の意味を知ること、登場人物や作者の思いを、その場に自身を置いてイメージする。

・感受した内容を、雰囲気や感情を表す言葉で意見交流を重ねながら、クラス全体で感じ方や解釈を共有し、歌唱表現につなげようとする。

< 3番「とっぷりと日がくれた里」 >

3番の歌詞「あらし吹きて雲は落ち 時雨ふりて日はくれぬ もしともしびのもれこずば それと分かじ野辺の里」

表4. 3番「とっぷりと日がくれた里」を解釈する場面

97	t	じゃ、これお願いしますね。はい、じゃあ3番。日が暮れてきました。で、今日も1日無事に終わりました。よく働きました。ふと見ると、あちらこちらに灯が見えます。はい、その時、Sくんどうですか？今日も1日よく頑張りました。はい。
98	c	えっと、もう疲れてて、えっとまあ、えっと早朝と同じように静かで静かになりたいっていうものがあるし、えっと、嵐ふきて雲おちって書いてあるから、まあちょっと寂しいというか、なんかそこら辺を工夫したらいい。
99	t	あの、今でもSくんこうなってますよ。こうなってる何か。
100	c	(手を挙げる。)
101	t	はい、Uくん。
102	c	はい、えっと。
103	t	いいよ。立っていいよ。立って。
104	c	えっと色で表すと藍色とか黒で、それで最初に、嵐ふきてのところをなんか強調して。

<主体的・対話的で深い学び>

・歌詞の冒頭の、自然の様々な変化をイメージし、音楽表現に結びつける工夫について考える (98)。

・イメージを色によって表現するという昼の部分 (76) の影響を受けて、夜を藍色、黒と表現する。

・昼の部分でみられた「ほっこり」(86) という言葉を用いており、児童同士が影響しあい、相互作用している。

・児童は歌詞「ともしびのもれこずば…」をイメージし、「おだやか」(108)、「楽しい、優しい」(110)、「ほっこり」(112)、「平和」(123)、「冷たい風が吹いてくる」(125)、「あったかい」(127)、「人間っていいな」(107) と感受し、雰囲気や感情の言葉で発言する。

105	t	あ、強調してほしい？強く、力強く歌ってほしいのね。強くね。強く歌ってほしい。そしてね、その一方ではね、灯があって、里、故郷に住んでる里が見えるわけ。ね、今日のご飯なんだろう？鍋かもしれないよね、温かいご飯が待ってるぞー！
106	c	(他の子どもの意見は聞き取れず。) いろんなところから明るい光が。いろんなところから明るい元気な色。
107	t	そうよね。人間っていいな。今、Nくんが人間っていいなって言いました。じゃあ、それ書いていい？人間っていいな。心はどんな感じ？
108	c	おだやか。
109	t	おだやかで。
110	cn	楽しい。優しい。
111	t	楽しい。うん。おだやかで。
112	c	ほっこり。
113	t	また、ほっこり。ほっこりが好きやね、みんな。ね、ね、うん。ちょっとなんか、ちょっとこう、ほっこりを別の言葉で。誰か言ってくれる？説明してくれる？
114	cn	(友達と話し合う。) ほっこりをー。
115	t	誰か、説明して、ほっこりを。うーん。はい、Yさん。
116	c	はい。えっと、あったかいとか、優しいとか。
117	t	あーなるほど。温かい感じね。じゃ、温かい感じね。で、お願いします。はい、3番の人。手挙げて。
118	cn	(手を挙げる。)
119	t	はい。Uくん何かある？
120	c	いや、はい。ほっこりの件で。
121	t	はい、どうぞ。どうぞ。
122	cn	ほっこりの件でって。
123	c	平和？
124	t	あ、平和。人間っていいな、平和だなんて感じ。
125	c	なんか、なんか、どんどん冷たい風が吹いてくる。
126	t	外は冷たい風なんだけども、外が冷たければ冷たい程、お家の中は？心の中は？
127	cn	あったかい。
128	t	あったかいね。お家でみんなで無事にね、今日1日ありがとうって気持ちでね。

＜教師の環境づくり＞

・歌詞に示された場面の状況を、「今日も一日無事に終わりました。よく働きました。ふと見ると、あちらこちらに灯が見えます。」(97) と言葉を加えている。さらに「今日もよく頑張りました。」(97) 「今日のご飯なんだろう？鍋かもしれないよね。温かいご飯が待ってるぞー！」(106) と言葉を加え、イメージしやすく、より豊かになるよう言葉掛けながら子どもたちの五感を刺激する。

・プロトコルには示されていない「人間っていいな」という児童の言葉を聞き取り「心はどんな感じ」と他児に問いかけ、児童間の意見交流を促す。

・1日の終わりの家庭での団欒の状況を感じさせるよう言葉を加えてイメージを促し、その時の心の有り様を問いかける。そして児童の言葉を用いながら、日々の生活を無事におくることができることへの感謝としてまとめる。

＜音楽科の特性＞

・自然の変化（前時の学習）や、灯火の下で1日の終わりの家族団欒の場面をイメージする。感受を言葉にして意見交流し、歌唱表現に結びつけようとする。

・一人の児童の言葉を、クラス全体でイメージして感じ取り、言葉にして意見交流し、雰囲気共有する。色々な見方や感じ方があることを理解し、他者に学ぶ姿勢を身に着ける。

③ グループ活動の場面

3つのグループは教室の三方に分かれ、リーダーのもと②で話し合った情緒や雰囲気をどのように歌唱表現するか意見を出し合っている場面である。教師から10分間という時間枠であること、「話し合い」と歌唱を交互に行うこと、5回は歌唱することが指示されている。教師は3つのグループを巡回する。ここでは昼と夜を担当するグループの一部を分析の対象とする。

表 5. 2 番担当グループの活動の様子

190	c	えっと、みんなで、こことここが逆になって、メゾフォルテのところメゾピアノで弱くなっていて、メゾピアノのところメゾフォルテでけっこう強くなっているの、みんなで歌う時に気を付けてください。
191	cn	はい。
192	c	男子と女子、混ざって。 …略…
198	c	Y、そこいけばいいやん。いいですか？はい、いい？1、2、はい。
199	cm	冬げしき 2番を歌う。
200	c	意見はありますか？ある人は手を挙げてください。
201	c	まだ、ここメゾピアノになっています。
202	c	えっと、聞いてください。ここメゾピアノで、クレッシェンドになっているので、ここを強くするのを忘れないでください。

<主体的・対話的で深い学び>

・児童たちはリーダーを中心に、意見の交流を行う。話題の内容は強弱が主であり、リーダーがメンバーの意見をグループ全体に確認しながら進める。
・全員がグループ活動に参加できるよう男女の立ち位置を工夫する。

<音楽科の特性>

・強弱という音楽的な表現のあり方をグループ内で意見交流し、自分たちの表現を模索する。
・歌唱活動しながら、互いの表現を聞き取って評価し、よりよい表現を目指して探求し、グループの表現を形づくることを経験する。

表 6. 3 番担当グループの活動の様子

222	cm	冬げしき 3番を歌う。
223	c	何かありますか。(聞き取れず。)くん。
224	c	…(聞き取れず)。(歌詞に印をつける)気持ちを込めて歌ってください。
225	c	…(聞き取れず)
226	c	全部大切と思うけど。
227	cn	はい。
228	c	えっと、大切は、大切なので、あらしふきて、なんかここは力強くで。
229	c	(意見を書く)
230	c	ここは力強くで、ここは里に帰ってきて安心した感じで、なんか優しい感じで歌った方が。
231	c	言って。
232	c	出だしが…(聞き取れず。)正直。(聞き取れず。)
233	c	さんはい。(手でリズムをとる。)
234	c	(聞き取れず。)
235	cm	冬げしき 3番を歌う。
236	c	自然に、なんか。(聞き取れず。)自然にえっと、体が伸びたりできるように。

<主体的・対話的で深い学び>

・歌詞からイメージできる雰囲気を歌唱表現に結びつけようと話しあい、大切にしたい部分(224～228)を指摘しあう。
・話し合いと歌唱表現を交互に行いながら、より良い表現を目指す。

・思いを歌唱表現するためには、身体全体を使うことが必要であること(236～240)に気づき、活動を進める。

・友だちの意見を大切にし、その意見(228)を書きとめ(229)る。

<音楽科の特性>

・歌詞から得た雰囲気や気分をどのように表現するか、考えたり工夫する態度と、具体的な方法を模索する経験をする。

・歌唱表現の場合において、思いを伝えるためには身体全体を使って表現することが大切であることを知る。

④ グループごとに演奏し、他グループから意見を求め交流する場面

グループ活動で意見交流し、歌唱活動で得たことをふまえてクラス全体の前で演奏する。他グループから演奏に対する意見を得ると共に、その意見を活かして再び演奏する。各グループの発表前後の一部を取り上げる。

表7. 1番担当グループの発表、及び他グループから評価を受ける場面

272	t	はい、ね、短い時間だけど集中してやりましたね。では、1番の人をお願いします。どうぞ。
273	cn	(ステージに移動する。)
274	t	1番のイメージで、どのくらい歌ってくれるか、で、聞いている人は、ね、気づきを出してあげてくださいね。(前奏開始)
275	cm	冬げしき 1番を歌う。
276	cn	(拍手をする。)
277	c	気づきはありませんか？
278	cn	(手を挙げる。)
279	c	Kくん。
280	c	はい。えっと、昨日も言ったんだけど、やっぱり同じ人が暗い表情なので、もっと表情を明るくして。
281	t	1番は暗いんですか？それとも、暗くてどんよりしてるんですか？それとも、爽やかなんですか？今からどんどん暗くなっていくの？それとも、明るくなっていくの？
282	c	明るくなっていく。
283	t	明るくなってくんよね。その気持ちをお願いします。(前奏開始)
284	cm	冬げしき 1番を歌う。
285	cn	(拍手をする。)
286	t	どうですか？はい、Wくん。
287	c	はい。えっと、昨日はMくんが言ったんだけど、Uくんはやっぱりなんか、伸びたり縮んだりしてるんだけど、他の人はしてる人もいるけどしてない人の方が多い。だからそこを直して。
288	t	この、この抑揚ですよ。だから、Uくんはその抑揚をこう、体で表現してくれる。そこまで。そこまでできそうな人。身体全体でやれそうな人。やってみようと思う人。
289	cn	(手を挙げる。)
290	t	ぜひ、それやってください。じゃあ、みんなでやってみましょうか。はい、起立。(伴奏を弾く。)
291	cn	(椅子から立つ。)
292	t	じゃあ、Uくんに注目。(前奏開始)
293	cm	冬げしき 1番を歌う。
294	t	良かったよ。…(聞き取れず) じゃあ、みんなの方から何かありますか？ Iさんどうですか？みんなの歌い方どうでした？
295	c	みんな上手でした。
296	t	みんな身体全体でね、表現してくれてたね。えーじゃあ、1班の人たちに何かありますか？いい？はい、Sくんどうぞ。
297	c	はい。えっとすごく早朝にふさわしいというか、そう言うとすごく綺麗な声だったので良かったと思いました。
298	t	あの、声がとても澄んできますよね。ね、だから朝の、朝の起きたばかりの澄んだ綺麗な景色が浮かんでくるようなさ、歌声でしたよね。ね、それをイメージして歌えた人。
299	cn	(手を挙げる。)
300	t	朝の、朝の空気をイメージして歌った人。やっぱりね。はい。ちょっと、はい、拍手。

<主体的・対話的で深い学び>

・他グループの音楽表現を聴き取り、評価し、気づき「暗い表情なので、もっと表情を明るくして。」(280)、「…してない人の方が多い。だからそこを直して。」(287)、「…伸びたり縮んだりしてるんだけど、…だからそこを直して。」(287)と気づきを発言する。「みんな上手でした。」(295)、「すごく早朝にふさわしいというか、そう言うとすごく綺麗な声だったので良かった。」(297)と評価する。

<教師の環境づくり>

・グループ活動について児童を評価(272)する。

・グループ発表では、歌うグループだけでなく、聴く児童も音楽に集中するよう促し(274)、友だちの表現に学ぶ態度を養う。

・他グループの児童の指摘を、その場で直ぐにチャレンジする機会(288～290)を設け、児童間の意見交流を活かすよう場づくりをする。

・「良かったよ。」(294)、「みんな身体全体でね、表現してくれてたね。」(296)、「声がとても澄んできますよね。…綺麗な景色が浮かんでくるようなさ、歌声でしたよね。」(298)と児童の向かう姿勢や表現を評価する。また、1グループの発表終了時、聞き手の児童たちに拍手するよう促す。

<音楽科の特性>

・感じたことや考えたことを、表情や身体全体で音楽表現することを知る。

・友だちの表現を、賞賛の言葉や拍手などで暖かく評価することを経験する。

表 8. 2 番担当グループの発表、及び他グループから評価を受ける場面

303	t	はい。じゃあ、2番目の人お願いします。さあ、昼になりました。さあ、オレンジ色の感じです。さあ、みんなよく見てあげてね。(前奏開始)何?順番があるの、並ぶ。いい?
304	cm	冬げしき 2番を歌う。
305	t	はい。
306	cn	(拍手をする。)
307	t	はい。お願いします。
308	cn	(手を挙げる。)
309	t	はい。Yくん。
310	c	はい。えっと、いつだったか先生が言ってたことで、えっと、なんか遠くを見て歌うっていうのをちゃんとやっていたから良かったと思います。
311	t	うーん。遠くまで声が届いてたよね。ありがとう。はい、Mさん。
312	c	はい。えっと、何かよく見ると男子とかなんか表情が暗かったりするんで、明るくしたらいいと思います。
313	t	はい。これ何色でしたか?
314	cn	オレンジ。
315	t	オレンジだよ。あ、でも、随分努力はしてるよね。努力は随分してるよ。
316	t	じゃあ、さらに、もうちょっとね、明るさのグレードをもうちょっと上げててください。(前奏開始) じゃあ、見てあげてね。
317	cm	冬げしき 2番を歌う。
318	t	お。今、特に誰がすごい頑張ってた?
319	c	Sくん。
320	t	言ってあげて。
321	cn	Sくん。Yさん。Kくん。Nくん。
322	t	ね、Nくんのすごいきゅーっと上がってきたよね。Kくんだってすごい頑張ってますよね。ね、じゃあ、表情以外で。
323	cn	(手を挙げる。)
324	t	はい、Iくん。
325	c	えっと、なんか、あの、聞こえたのは聞こえたんだけど、えっとほとんどYさんの声だったから、なんかもうちょっと。
326	t	じゃあ、Yさんが声をおとした方がいい?それとも、みんながあげた方がいい?
327	cn	みんながあげた方がいい。
328	t	じゃあ、それでやってみて。(前奏開始)
329	cm	冬げしき 2番を歌う。
330	t	はい。さらにこう明るさは力づいてきたよね。
331	c	でも、Yさんの方がもっとアップした。
332	t	うん。そう。Yさんがさらにアップしたよね。でも、全体的の、ね、その、こう昼の明るさは出てきたと思います。はい、ありがとう。は、じゃあ、3番お願いします。

<主体的・対話的で深い学び>

- ・伝えたい位置、遠くを感じて歌うと、歌声が遠くまで届く (310) ことを友だちの発言を通して知る。
- ・色をイメージしながら歌うことで、表情を明るくすることができることを意見交流する中で気づく。

<教師の環境づくり>

- ・発表時の並び方に児童の計画があることを察して助言し、児童のグループ活動が、より活性化するように仕向ける。

- ・児童の発言一つひとつに同意、また「遠くまで声が届いてたよね。ありがとう。」(311)、「努力は随分してるよ。」(315)、「お。今、特に誰がすごい頑張ってた?」(318)、「さらにこう明るさは力づいてきたよね。」(330)、「Nくんのすごいきゅーっと上がってきたよね。Kくんだって、すごい頑張ってますよね。」(322) と肯定的にコメントすることで、児童の主体性や積極性を認め、さらにやる気を引き出す。

- ・「言ってあげて。」(320) と互いに聴き合い、見合うことを促し、児童同士で評価するよう促す。

- ・教師の判断を児童に押し付けるのではなく、児童に思考・判断を促す (326)。

<音楽科の特性>

- ・音楽表現の技法として、届けたいところまでの距離を感じることが大切であることを知る。

- ・友だちの歌唱表現を観合い、聴き合う力を身につけ、併せて評価の大切さと具体的な評価の観点を知る。

⑤ 本時のまとめとして全員で1～3番を歌う

グループ発表後、全員で1～3番を歌う場面である。クラス全体での解釈、グループ活動・グループ発表での意見交流と歌唱活動によって作り上げてきた3つの部分を、クラス全体で一つの

ものとして表現する場面である。1～3番の各部分の特徴を意識しながら、全体を通して歌唱するための意識の集中力と、一つの表現として整えることが求められる。

表9. 全員で1～3番までを歌う場面

355	t	はい、ありがとうございます。戻ってください。では、1番、2番、3番をね、1番と2番と3番、今日それぞれの班で工夫してくれました。それをみんなでやってみたいと思います。ね、はい。では、全員、起立。
356	ca	(椅子から立つ。)
357	t	さあ。はい。1番はどんな感じ？ (子どもの言葉を掲示の表に書き込む)
358	cn	おだやか。きれい。水色。
359	t	2番は？ (子どもの言葉を掲示の表に書き込む)
360	cn	明るい。オレンジ。ぼかぼか。
361	t	3番は？ (子どもの言葉を掲示の表に書き込む)
362	cn	ほっこり。あたたかい。人間っていいな。平和。おだやか。
363	t	では、いきます。(前奏開始)
364	cm	冬げしき 1番～3番を歌う。
365	t	うん。いいよ。座ってください。今、どうだった？自分たちで歌って。歌ってみてどうでしたか？うーん。はい。
366	cn	(手を挙げる。)
367	t	ここは、ここはよくできたけど、ここはちょっととか。先生も今、思った、思ったことがあります。それをやっぱり感じなきゃ。今、自分たちでこの1番、2番、3番表せたいと思う人。
368	cn	(手を挙げる。)
369	t	もう一歩、もう一歩だなと思った人。
370	cn	(手を挙げる。)
371	t	先生もう一歩と思った。どこが特にもう一歩だったと思う？何番でしょう？
372	cn	1。2。3。3。
373	t	3番？じゃあ、Hさんどうして3番？
374	c	えっと、(聞き取れず)、嵐吹きてっていう嵐のところも(聞き取れず。)後からが(聞き取れず。)
375	t	あらしを強く歌いたって、あらし。先生ちょっと2番のことが誰か言ってほしいんだけど。はい、Sくん。
376	c	はい。えっと、2番が、えっと明るい感じがもうちょっとほしい。
377	t	うん。今そうそう。先生顔見ながらやったらね、からすって、すごい今からすが落ちてくるかと思った、ね。からす、あそこさ、1番がすごく素敵だったの。ね、ずっと眠ったままなんよ、2番も。2番は起きてよ。ね、2番パッと起きようよ。ね、何かさ、身体でアクションしたら？2番なった時に。だから、「きしのいえー」、すぐパッとこの、どんなアクションしたらいい？
378	c	こう。(鳥のように手を動かす。)
379	t	絵本が例えばパッとめくるとか、パッと何か自分の中でパッと目覚める何かアクションしてください。はい、起立。やってみよう。

<主体的・対話的で深い学び>

・意見交流や演奏を通して確認し合った雰囲気や感情等の言葉を、複数の児童が発言する。グループ活動前と、グループ活動での歌詞の解釈を音楽と結びつけ、表現活動する。また他グループの演奏の鑑賞を通して得たことを踏まえ、1～3番まで連続して表現する。

・表現している時も、自分たちの声のあり方について客観的に聴き取り、感じ取り、考えることの必要性を求められ、3番の表現について意見(374)を言う。また「明るい感じがもうちょっとほしい。」(376)と発言する。さらに、3番の歌い始めの強さについて意見(387)がでる。歌唱しながら、自分の声を聴いたり、全体の声の響きやその表情を感じ取することは、5年生にとっては簡単なことではないと思われるが、言葉にして発言している。そこには、知覚・感受、思考や判断、そして表現への過程がある。

<教師の環境づくり>

・グループ活動で児童が発見した表現のあり方を、全体を歌う前に、子どもたちに振り返り発言させながら総括(357～362)する。

・自分たちの表現について、判断する力「ここはよくできたけど、ここはちょっととか。…それをやっぱり感じなきゃ。」(367)を児童に求め、よりよい表現を追求する姿勢をもたせる。

・児童の表現について、児童たちに評価を求め(371)、改善点を考えさせる。

・児童の気づき(376)に言葉を足して(377)、1番と2番の表現の違いを他児に伝える。

・表現のあり方を大きく変化させるために、身体表現「何かさ、身体でアクションしたら？」(377)と子どもたちに提案し、具体的な方法を考えさせる。

380	ca	(椅子から立つ。)
381	t	これでもいいよね。うん、からす。じゃあ、これでやってみようか。(両手でこぶしをつくり、肘を引き締める) いくよ。
382	t	では、2番の「いまだ」からいきます。さんはい。(前奏開始)
383	cm	冬げしき 1番の「いまだ…」のところ～2番まで歌う。
384	t	はい、今、気づきがある人。
385	cn	(手を挙げる。)
386	t	はい、Uくん。
387	c	はい。えっと、からすのところ、なんかすごく強くなったから強くなりすぎてあらしみたいに。
388	t	そうそう。しかもからすがどんだけ巨大みたいなのからすってね。そんな大きくないよね。ちょっと張り切りすぎちゃったね。そう、ちょうどいいところを見つけるのが難しいんだよね。「いまだ、」さんはい。3番いこう。(前奏開始)
389	cm	冬げしき 1番の「いまだ…」のところ～3番まで歌う。
390	t	すごく今素敵だったと思う。はい、座りましょう。では、昨日のようにね、ちょっともう時間が来たので、音楽カードは教室で書いてください。ね。はい、では終わりましょう。全員起立。

・表現の難しさ「ちょっと張り切りすぎちゃったね。そう、ちょうどいいところを見つけるのが難しいんだよね。」(388)を児童に伝える。

<音楽科の特性>

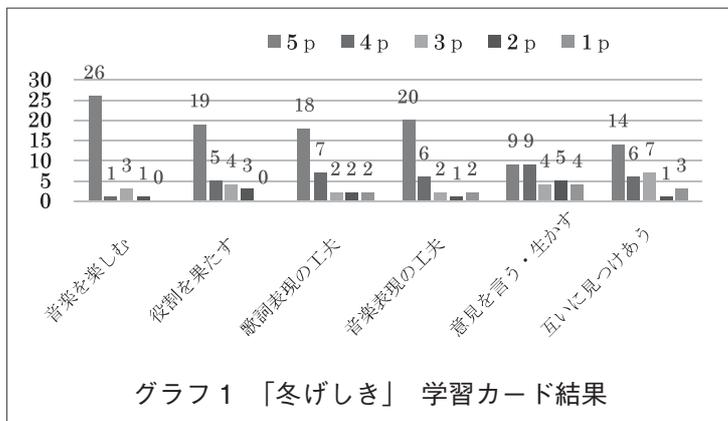
・表現をする時は、自分が感じるより大きく、程度を高めて表現することで相手に伝えていく。併せて、程度が過ぎるとバランスが崩れ、統一感が失われるという、すべての表現について共通する難しさ(388)を経験する。

・表現の難しさと、よりよい表現を追求していく姿勢に気づく。

(2) 学習カードの分析

児童は授業終了時に音楽学習カードを記述する。音楽学習カードの記載内容は9項目である。記述式項目は3項目であり、最初に「目あて」、最後に「自分のこと」「友達のこと」である。他の6項目は5段階の自己評価であり、5はレベルが高く、1は低い。各項目の内容は「(1) 音楽を楽しむことができましたか。」「(2) 自分の役割を果たすことができましたか。」「(3) 歌詞の内容を感じ取って、表現を工夫することができましたか。」「(4) 強弱やフレーズなど工夫しながら歌うことができましたか。」「(5) 進んで自分の考えを言ったり、友達の意見を活かしたりできましたか。」「(6) お互いの表現のよいところを見つけあうことができましたか。」である。

6項目の5段階の自己評価の結果をグラフ1に示す。「主体的な学び」に関わる項目は(2)から(6)であり、「対話的な学習」



は主に(5)と(6)、「深い学び」は(3)と(4)と考える。また、授業のねらいの達成に関する項目は(3)と(4)である。この項目で5と4の自己評価は、(3)は26名、(4)は27名であり、8割の児童は授業のねらいを達成できたと捉えている。この項目で評価を3～1とした児童の

自由記述をみると、自己課題として「もっと自然に強弱ができるようになりたい」など表現について、また歌唱時の表情をあげていた。「音楽を楽しむことができましたか」については5と4の評価が29名あり、音楽科の大きく、かつ基本的な目標は達成できているといえよう。

7. 考察

ALのキーワードである「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」、及びALを実現するための「教師の環境づくり」、「音楽科の特性」について考察する。

1) 主体的な学び

音楽科の特徴は音を知覚・感受すること、及び感受した特質や感情、雰囲気を言葉で表していくことであり、言葉を通して意見交流することである。対象とした授業時のねらいは「グループごとに、担当部分の歌詞を感じ取り解釈しながら表現の在り方に結びつけ、表現する。また、そこで得た解釈のもと、全員が全体唱する。」である。歌唱活動において、歌詞をどのように捉えて表現するかは、最も基本的、かつ重要な内容である。グループ活動開始前に、1～3番までの歌詞の捉え方を全体で確認する時、教師は文語体の歌詞を児童の日常と結び付けている。それに導かれて、児童は興味をもって情景をイメージし、自分の言葉で発言している。「ひんやり」「しずか」「ぼかぼか」「あかるい」「あったかい」など五感に結びつけた発言があり、「さわやか」「すっきり」「ほっこり」など雰囲気や情緒を感じ取った言葉となる。さらに「平和」「人間っていいな」という、深い思いを抱いた発言もある。これらは児童が自分のこととして感受し、自身の言葉で発言したものであり、主体的に学び、また他児や教師との相互の作用から学ぶことができた成果といえよう。また2番の昼の部分で、意見交流の中で児童が提案した「イメージを色で表す」という雰囲気を表す手法は、早速他児によって3番の夜の部分で活用されている。昼の部分で現れた「ほっこり」という言葉も、夜の部分で他児によって用いられている。一人の児童の感受がクラスの中で共有され、他児に影響を与え、探求の過程で相互作用が起きていることがわかる。

児童は、歌詞に表された内容をイメージし、感性をはたらかせて言葉で表現すると共に、意見交流によって相互作用をおこし、歌詞の解釈という学びを深めていた。このように、新たに得た解釈や手法を共有しながら歌唱表現のあり方について意見交流し、なお探求していく姿は、まさにALという学習方法によって得られたといえよう。

2) 対話的な学び

音楽科における「対話的学び」について考える時、コミュニケーションの対象は音楽そのものと、音楽から得た感受を共有、協働するための言葉がある。

プロトコルには児童と教師の言葉、動き、拍手や挙手、立座等の身体活動等を含め、503の記録がある。そのうち、1番、2番、3番、1～3番を全員で歌唱したのは計7回で、その多くは授業開始時と終了時である。フレーズ唱やグループによる歌唱は26回であり、全員での歌唱と合わせると33回の歌唱活動を行っている。歌唱表現には技術が求められる。児童個々の技術は、グループや全体活動での音楽表現を媒体とした交流の中で経験を積みながら、歌唱技術を身につけていくことができる。また、音楽を介する場合、思いを音楽に乗せて表現する側と、それを知

覚・感受する聴取側の対話がある。歌唱活動の前後では言葉を介した対話がある。歌詞から受ける感情や雰囲気についての捉え方と表現意図、そしてフレーズや構成など音楽に結びつけた表現についての意見交流がなされる。歌唱表現を通じた対話では、意見交流やグループ表現活動で得た知識や技術をもとに課題が提案されていた。児童と教師、児童間での音楽と言葉による対話の相互作用によって、学びが深まっている。

教師の言語表現は、児童の単語による発言と比べると、回数は少ないものの言葉の量は大変多い。特に、授業開始後の、1番から3番までの歌詞に示された内容を児童に実感させることを意図した場面では、多くの言語を用いている。グループ活動とグループ発表後の意見交流場面では、教師の言語表現には revoice が多く、児童の意見を受止める形で評価し、クラス全体に伝えると共に、他児からの発言を促す。一人の児童の言葉を、他児は自分なりにイメージを膨らませる。これは他児の言葉を大切にすることにつながる。同年齢の児童の心の有り様は、生活経験の質と量が近いことから相互に推測がしやすく、共感もしやすいと推測できる。一人の児童の発言に共感したり形容詞を加えたり、新たな発想を得て他の言葉で発言するなど相互作用が生じている。複数の児童と教師間でコミュニケーションがなされ、「対話的学び」となったといえよう。その作用によって個々の児童の知覚・感受に新たな広がりや深まりが生じていた。また教師が児童の言葉を取り上げ、他児にも感受や思考を促す場面があった。教師が一人ひとりの児童の発言を大切にすることは、児童間の対話を活発にし、盛り上げ、学習内容に結び付け深めていく効果的なコミュニケーションの在り方と考える。AIによって、言葉をより深く考え、歌詞の捉え方を新たにし、より高い学習へと影響を及ぼしていたと考える。

3) 深い学び

3節からなる「冬景色」の歌詞は、人々の日常生活を感じさせながら、日本の自然の美しさを詠ったものである。1913年(大正2年)より文部科学省から歌唱教材と指定され、2007年(平成19年)には「日本の歌百選」に選ばれるなど老若男女に親しまれている。ただ、歌詞は文語体であり、小学校5年生にとって、歌詞に表れる言葉の理解や、表されている内容をイメージすることが難しい部分がある。教師は児童の感性に響くよう言葉を足しながら解説し、「どんな感じ?」と質問する。児童は、意見交流によって、情景やそこにいる人の存在に気づく。児童は歌詞に詠まれた一つひとつの言葉の意味を知ると共に、詩に詠われた場面の情感やその場に登場する人の気持ちをイメージし、その雰囲気や感情を感受しようとする。そして、その感受を、持てる語彙で表わそうと思考し、判断し、言葉を選んで発言する。一人ひとりの児童は、この過程を経ると共に、他児の言葉に感心したり触発されたりしながら、捉え方や感じ方が多様であることを知り、さらに思考を深める。そして、他児の発言を教師が受け止めるのを見て、安心して自分も発言しようとする。

児童が雰囲気を「ほっこり」という言葉で示したり雰囲気を色で表した部分では、教師は発言を取り上げ、その内容をクラス全体に問いかけたり、活動に活かしていた。一人の児童の目新しい言葉や新たな発想は、早速次の場面で他児に取り上げられ活用されている。児童の一つの発言は相互作用しながら、クラス全体での探求に参与している。

音楽表現についても意見交流が行われ、課題の発見や表現のあり方を探求している。探求後の歌唱では単に言葉をメロディーにのせて歌唱しているのではなく、言葉の持つ意味を自身の経験を通して捉え、表現している。また友だちの発言に影響を受けながら、歌詞を自身の中で再構成している。言葉を通して相互作用がおこり、児童個々がより深く歌詞の言葉の意味に注目し、考え、判断し、イメージする中で思いを膨らませることができたと推測できる。意見交流によって得た知識・技術は、言われたグループだけに影響があるのではなく、それを言及した自身のグループ表現にも⁶⁾影響する。時には意見に対応した表現が強すぎ、他グループから修正を求められる場面もある。言葉や演奏による交流を通して、児童はよりよい表現を探っている。授業の最後の部分での、「…自分たちで歌ってみてどうでしたか？…感じなきゃ…」という教師の言葉は、表現活動する場合の永遠の課題と言えよう。そして本対象授業の表現についての探求も、継続する。

4) 教師の環境づくり

教師の役割は児童の主体的な活動、対話的な活動、そして深い学びを得る活動を支えることである。本研究では、グループごとに“文語体の歌詞の解釈”と“歌詞の解釈を歌唱表現に結び付けていく”こと、それを踏まえて全員で“全体唱する”ことを支えることである。

教師は、歌詞を解釈する場面では、児童が文語体の歌詞を五感で受け止めて理解し、豊かにイメージできるよう言葉を置き換えたり、言葉を足して説明している。情景の特質や感情、雰囲気と共に、そこに存在している人を意識するよう促し、その人になったつもりで気持ちを推測し、言葉にして表すよう促している。教師は「…歌詞を感じ取り解釈しながら表現の在り方に結びつけ…」という授業のねらいを達成するため、児童が感受できる環境をつくり、心を揺るがすこと、それを思考・判断、及び言葉で表現することを促す重要な役割を果たしている。そして児童の五感で受け止めた発言や、感情や雰囲気の発言を引き出している。発言した児童には承認や同感を、他児には発言を伝えると共に、その発言をさらに深めたり、児童個々に歌詞への思いを深めるよう促している。同年齢の児童の発言が互いに影響し合い、各自の生活経験から得た感性による発言を促すなど、相互作用を生じさせている。

教師は、さらに文章から場面を想像させ、そこに登場した人の気持ちをイメージすることを促し、その人の気持ちを汲み取りながら歌唱表現するよう指導している。また、児童が歌詞の解釈を歌唱表現に結び付けていくために、グループ歌唱表現をした後、指摘を受けた表現のあり方に再チャレンジする機会(288～290)を設けている。指摘した児童の意見を大切にすると共に、指摘されたグループには指摘の点を意識しながら、よりよい表現を目指す意識と意欲をもたせ、具体的な表現のあり方を実践を通して模索し、調整することを促している。

加えて教師は、授業全体を通して児童の発言を大切にしている。そして児童の発言や、向かう姿勢、表現に対しておしみにくく評価する。ほとんどの場合、評価された児童は、さらに発言、姿勢、表現など指摘されたことをレベルアップしている。加えて、教師の revoice は、児童が大きな評価と捉えていることが推測できる。音楽の感受のあり方は個々さまざまであり、正解は無い。誰でも自分の感受のあり方に自信があるとは限らず、むしろ自信をもてないのではなかろうか。

児童は、教師の revoice を一つの承諾の形として受け止めている。感受すること、そしてそれを言葉として表現することには価値あることと受け止めている。そして、他児は、自分も認めてもらいたいと、感受することに積極的になり、さらにその結果を表現しようとするのではなからうか。この循環により、児童たちは主体的な活動を展開していくと推測する。

5) 音楽科の特性

音楽科の特性は音・音楽そして言葉を、知覚・感受し、思考、判断の対象とすることである。小学校音楽科の教育には、表現や鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、音や音楽と生涯にわたり豊かに関わる資質や能力を育成することが求められている。平成 20 年度の学習指導要領には「思いをもって」表現することが書き加えられ、平成 29 年度の改訂では、さらに「身につける」ことが求められている。

表現の本質は、音楽に特質や感情、雰囲気や質として感受することである。この質を認識し、意識化し、音楽や言葉で表現して他者と共有できる能力を育成することが音楽科の特性である。歌詞から得られる質について感受、思考、判断しながら言葉を通して意見交流する。児童間では児童間で受け止めやすい言葉による評価がみられた。教師は児童の発言を取り上げ、その言葉についてより深く思考するよう促していた。これらの意見交流を繰り返すことにより、更なる感受、思考、判断に広がりが見られ、深められていた。

意見交流によって得た特質や雰囲気を音楽表現に盛り込もうと、互いに表現し聴取しながら、さらに意見交流を繰り返していた。ここでは、意識して表現し、聴くことに意識を集中している。この音楽表現と言語を交流することは、質としての捉え方の多様性を互いに知ることとなる。音楽表現のあり方に気づき、知識として身につけ、意図的に表現することについての技術を高めることになる。これは AL によって、同年齢の友だちの感性を知るという経験を通して、感性のあり方や多様さを知ることであり、友だちという存在に意識を向け、学んだり憧れの対象として大切に思う気持ちをもつことにつながると考える。

音楽表現には技術が必要である。グループや集団での歌唱表現を繰り返すことは、個の表現技術の成長を促す。友だちという身近な存在による憧れや目標の対象となり、意欲を引き出すことも期待できる。そして教師は、児童が表現しながら、合わせてグループ全体の表現を聴き取ることが求めている。児童にとって、表現しながら、加えてその表現を聞き取るとは容易なことではなく、集中しないとできないことである。児童の表現を教師が評価するのではなく、児童間で評価し、よりよくするための方策を判断して意見として述べるには、集中力が求められる。教師の評価に添って表現することとは明らかに異なり、児童の聴き取る力、判断する力、そして表現力が養われると考える。

音楽科の特徴は音・音楽によるコミュニケーションを通してなされる。そして他者と共感、協働するには言葉が重要な役割を果たす。音楽の要素が関連し合って醸し出す雰囲気や捉え方など音・音楽を把握する能力、及びそれを言葉にして表現できる言語能力の発達は経験や個性によって多様であるが、同年齢集団のクラスの個々をもつ能力を交流することによって、深い学びが達成できると考える。そして、他者に学び、他者を大切に作る姿勢をもつことや、音・音楽に質を

感じ取り楽しむという豊かな生活を、生涯にわたって継続できると考える。

まとめ

児童は、音楽や言葉を知覚し、知覚したことを自身の感性を通して感受し、思いや考えを言葉にしていた。また既知の知識や新たな情報をつなぎ合わせて思考し、納得のできる落とし所をみつけるという判断をし、自己の考えを言葉に置いて発言しており「主体的な学び」といえよう。同年齢同士は、経験の量や情報の取得など生活の質が近い。一つの発言に共感、同調、付け加え、また新たな視点での発想などの相互作用がみられ、「対話的学び」が行われていた。本研究の授業のねらいは、一つは「情景を感じ取る」、二つ目は「曲想を生かした歌い方を工夫する」である。児童は歌唱表現し意見交流をする中で、歌詞と音楽を感じ取り、考え、その思いを音楽と言葉で表す活動を重ねた。さらに他児の言葉のニュアンスについてクラス全体で話し合うなど、「深い学び」ができたといえよう。以上のことから、この授業は「主体的・対話的で深い学び」といえる。

ALを実現するには、教師の役割が甚大であることが確認できた。本稿で対象とした授業のねらいは「感じ取る」ことであり、「工夫する」ことである。いずれも児童自身の感性と思考・判断が求められる。児童の知覚をどこに集中させるか、そして児童の感受力を引き出すための手立てが考えられていた。音楽科は、音・音楽、そして歌詞が教材となる。対象とした授業の教材は文語体の歌詞であることから、教師は、児童が言葉と詩を五感で感じ取ることができるよう工夫していた。また、児童が自由に思いを意見交流できるのは、教師への信頼関係が確固としていること、そして互いに学びあう児童の人間関係がつくられていることが前提であり、これは教師の日々の授業の中で培われるものである。さらに、教師には児童の自由な意見交流を促し、妨げず、定められた時間内でねらいの達成に向かうよう調整する力が求められる。そのためには、教材研究と共に、児童個々の発達や興味・関心事にも理解が必要である。加えて、一人ひとりの児童を認め成長を願う教師の人格、そして教科の特性に基づく臨機応変な指導力が必要であることがわかった。

児童は「冬げしき」という歌唱共通教材の文語体の歌詞を、自身の感性を通してイメージを広げ、意欲的に解釈しようと取り組んでいた。解釈した詩をどのように音楽表現に結びつけるかを意見交流する中で思考し、表現の方法を決めていた。意見交流する中で、他児から色々なもの見方や感じ方を知り、自身の在り方を広げていた。そして音楽を共有する中で、互いを認め、主体的に知覚・感受をはたかせ、よりよい音楽表現を求める意欲と態度を高めていた。

一つの音楽科授業でのアクティブ・ラーニングを通して、音楽科の見方、考え方を働かせ、音楽と関わる資質と能力が育つ過程をみることができ、今後児童が音楽を愛好していくことを期待できた。

最後に、研究の機会を提供していただいた山口市立大殿小学校の竹田礼子先生と5年生の児童のみなさんに、心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 平成 20 年度改定の学習指導要領
- 2) 同掲書
- 3) 平成 29 年改正の学習指導要領
- 4) 西園芳信 (2008)「生きる力」をはぐくむ音楽科教育の展開〔音楽〕－知覚・感受による音楽の質的世界の認識能力の育成－『中等教育資料』ぎょうせい第 57 巻 9 号 pp.22-27
- 5) 平成 27 年 8 月 26 日「教育課程企画特別部会における論点整理」p.18
- 6) 河北邦子・竹田礼子 (2014)「小学校音楽科の創作活動にみる連続性と相互作用の研究」山口学芸大学研究 第 5 号 p.1-26